

マンスリー・トーク(64)

2014.3.1

木村 謹

中山道の板橋宿を訪れました

中山道は私にとって、気にかかる街道なのです。一昨年、諏訪湖へ行った折、あそこに中山道があり、旅愁を楽しんだのでした。そんなわけで、日本橋を起点に中山道始めての宿、板橋を見に行きました。

都営三田線の新板橋駅

板橋は良く知らない。そこで、板橋にお住まいの旧友Hさんに聞いてみると、都営地下鉄の新板橋駅が便利という。無理を言ってその駅でお目にかかる。

そこには、旧中山道という程よい道幅の商店街が埼玉へ向いて伸びているのでした。

板橋宿は商店街だった



本陣、脇本陣が4軒、旅籠が54軒あったというが、今では本陣跡という石碑がマンションの前庭に立っている程度なのです。説明板をみると、新撰組の近藤勇が流山で政府軍に捕らえられ、ここで処刑されるまで本陣豊田家に幽閉されていたのでした。



宿場町の面影といえるか、このお店は米屋さん

商店街ですから、日用品、雑貨、青果物、食品店など各種のお店が軒を連ね、あまり宿場町という雰囲気ではない。そんな中で古いものを探すと、米屋さんがまず古い雰囲気なのでした。

板橋の橋

商店街を北上してゆくと、石神井川が西から東に向いて流れており、板橋の橋が架かっています。昔は板の橋だったらしいが、いまは車も走る普通の橋。



距 日本橋二里二十五町十三間 と表示がある

春は兩岸の桜が見事だという。この川の手下には江戸時代、加賀藩前田家の広大な下屋敷があったそうです。

皇女和宮の江戸下向

皇女和宮は、弘化3年7月、孝明天皇の異母妹として誕生、のち文久元年11月、わずか15才にして徳川家茂の正室になるため、中山道69次を旅してこの板橋宿で最後の宿泊をされた。徳川幕府の威信は地に落ち、勤皇佐幕、尊皇攘夷の嵐の中、幕府は和宮の降嫁によって公武合体して難局を乗り越えようとした。和宮は、これより前に有栖川宮熾仁親王との婚約があったのだが、これを白紙に戻されて翌年2月に家茂と婚儀。将軍家茂は2年ほどして長州征伐で上方へ赴き、大阪で病没される。その後、最後の将軍慶喜を討つ東征軍総裁として東海道を江戸に向かったのは、かつて和宮と婚約があった有栖川宮熾仁親王であった。和宮は江戸が戦になるのを避けようと、諸方に向けて真剣に嘆願、奔走され、西郷隆盛、勝海舟の交渉もあって江戸城は無血開城となった。慶応4年、徳川慶喜は大政を奉還、このとき和宮は20才、いたいけな皇女が踏みしめた青春だったのだ。それから10年、和宮はわずか32才の若さで運命の人生を終えたのである。